

第3回

DTM講座

～楽典的知識について②～

目次

1. 音の種類
2. スケール
3. 長調と短調
4. 特殊なスケール
5. コード
6. コードの種類
7. コード進行
8. 特殊なコード進行（そうでもない）
9. コード内で出している音
10. 音の進む形
11. 転調
12. 最後に

②をはじめる前に・・・

①の講座で少し補足をいれておきたいと思います。

まず前回、12の音の中にも微妙な音があるといいましたが、その音自体に名前はありません。

(デチューンというのは、あくまでも音をいじる行為の名前であり、音自体の名前ではありません。)

強いていうなら「ドの音をデチューンした音」みたいな言い方になると思います。(デチューンは音楽知識というよりDTM、特にシンセサイザーよりの話なので細かいところは知らないです・・・)

あと、前回の「長調と短調」で「ハ長調」の「ハ」ってなに？
と思う方もいると思います。

それに関してはコードの話にも関係しているので、ここで解説させていただきます。(そんな難しい話じゃないです)

まずは下の表を見てください

英語での表記	日本での表記	主音
C	ハ	ド
D	ニ	レ
E	ホ	ミ
F	ヘ	ファ
G	ト	ソ
A	イ	ラ
B	ロ	シ

つまり「～長調」の「～」の部分により主音がどれかというのを表しているわけです。

ちなみに英語表記のときは「長調」のことを「dur」（ドゥア）と表記し、「短調」を「mol」(モール)と表記します。

例

日本でいう「ハ長調」は英語表記で「C dur」となり、

英語でいう「b mol」は日本表記で「ロ短調」、となります。

英語表記を見ると分かる人は分かると思いますが、これが今回説明する「コード」に関係するんですね。

ではいよいよ②コードの内容に入っていきたいと思います。

5. コード

ここからは、音楽的知識でも特に、作曲の際に必要な
なってくるものになります。

最初に「コード」というものは何か、ということを説明した
と思います。「コード」というのは、前に紹介した12の音
のそれぞれの違う音を同時に鳴らすことを言います。

(これを「和音」と言い、つまり和音の英語名が「コード」
と言うわけです)

ここでは、このように「コード」と言うものが何なのかにつ
いて説明しましたが、実際の作曲では関係のない話なので
知識として心の隅でも置いておいてください。

ちなみにもっと理論てきな話を知りたい方は「Wikipedia」
の「和音」についてのコラムを見ると幸せになれます。

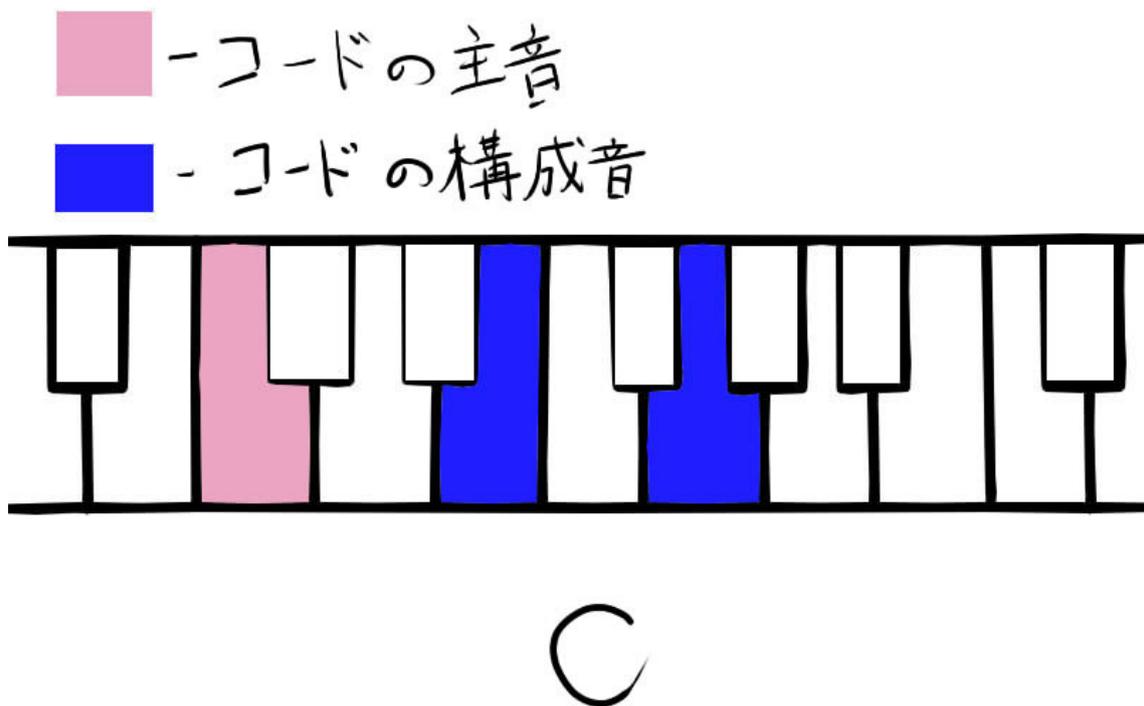
次から実際のコードの内容について説明していきます。

6. コードの種類

ここではコードの種類について話していきます。

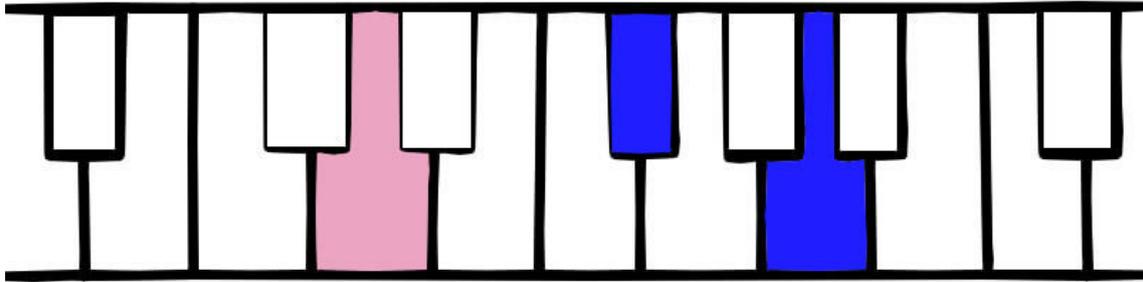
①の追記として書いた表の中に英語での表記がありますが、これが「コードネーム」(別に殺し屋のあだ名とかではない)になります。

基本のコードを一つずつみていくと



■ - コードの主音

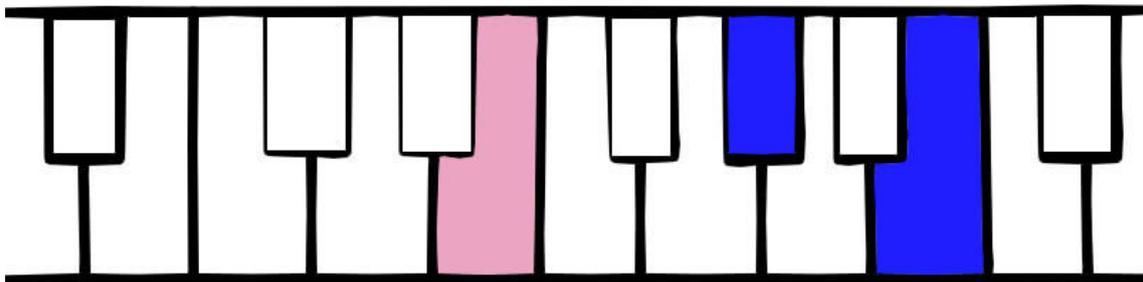
■ - コードの構成音



D

■ - コードの主音

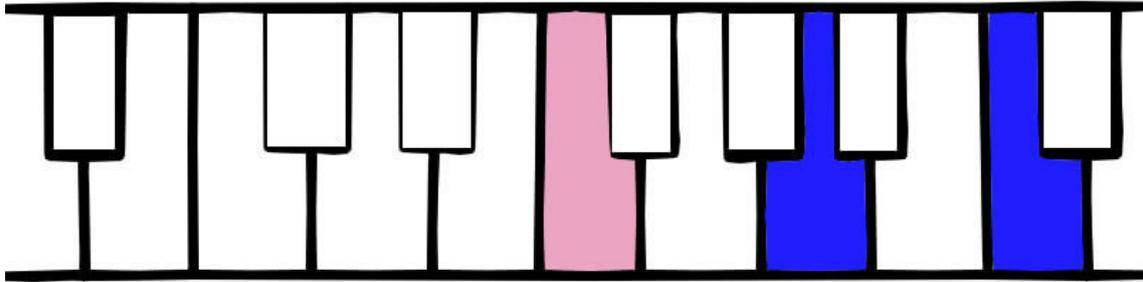
■ - コードの構成音



E

■ - コードの主音

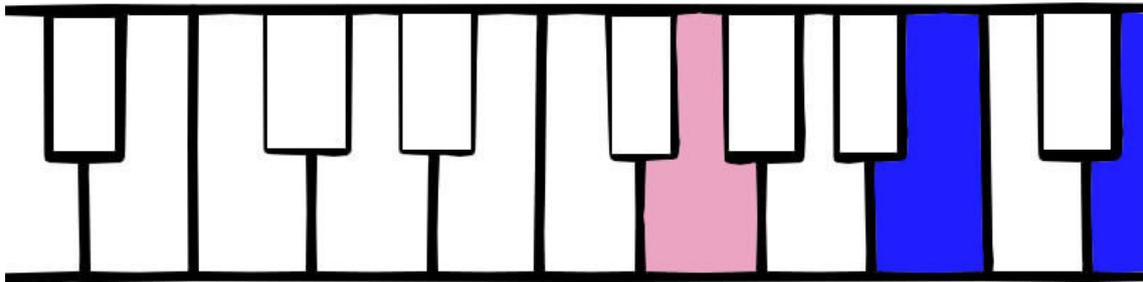
■ - コードの構成音



F

■ - コードの主音

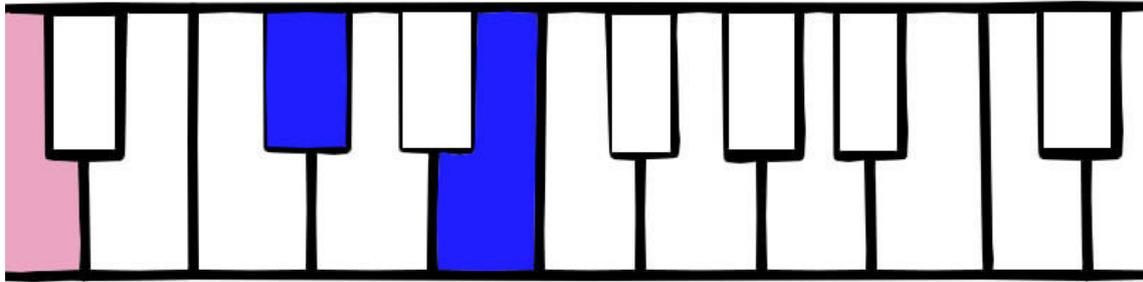
■ - コードの構成音



G

■ - コードの主音

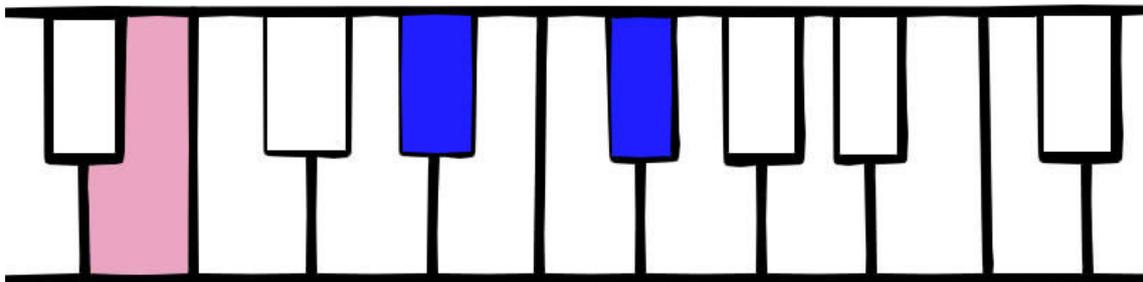
■ - コードの構成音



A

■ - コードの主音

■ - コードの構成音



B

このように見てみると一応この主音を含めた三つの音には法則があります。

全音を進むことを「1」、半音を進むことを「0.5」とした際に

主音と、主音から「2離れた音」と「3.5離れた音」で構成されていることが分かります。

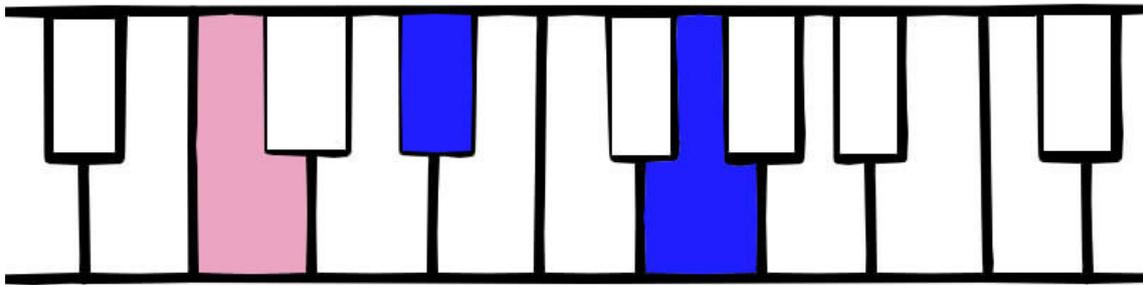
(本当は度数といった考え方があるのですが、それはややこしくなるので今回の講座ではこう説明していきます。)

この7つのコードがこれからやっていく上で基礎となっていくことなので覚えてください。

さて、この7つのコードにもそれぞれ細かく種類が存在します。これを今から紹介していきます。

・・・こっから説明がおおくなるよ！！

■ -コードの主音
■ -コードの構成音



C_m

最初にマイナー・コードについて説明していきます。

先ほど紹介した「C」に「m」というのがついていますね。

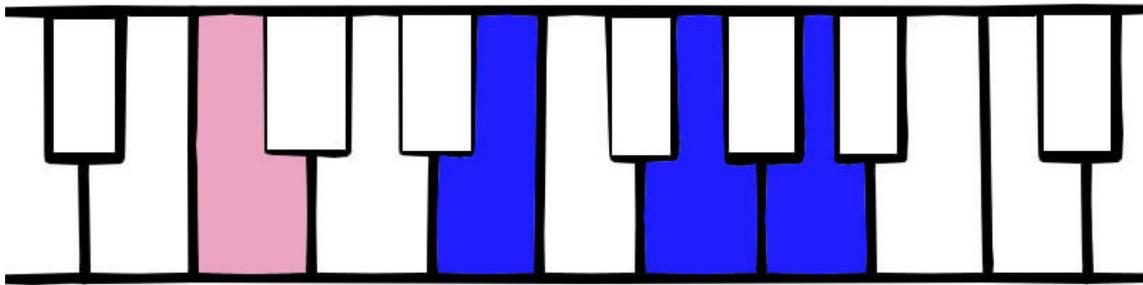
これはマイナー・コードと呼ばれているもので、「C」と比べてみると分かりますが構成音の「ミ」が半音下がり「ミ \flat 」になっていますね。

全てのコードに対して分かりやすく言うと

「主音から2離れた音を半音下げる」つまり1.5離れた音にしたものです。

マイナーというだけあってこれは暗い響きがします。

■ - コードの主音
■ - コードの構成音



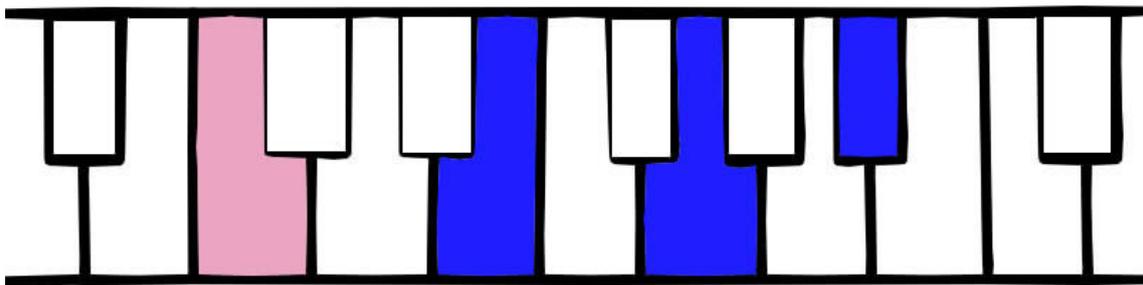
C₆

今度は「C₆」となっていますねこれは**シックス・コード**と言い、名前の通り主音から数えて6つ上に音が追加されています。

上のルールで表記すると

「主音から3．5音離れた音からさらに全音離れた音」つまり主音から「4．5音離れた音」を追加したものです。ちなみに「C_{m6}」というものありこれは上記の「C_m」に主音から数えて6つ上の音をたしたものになります。（つまり「ド、ミ^b、ソ、ラ」の4つになります。）

■ - コードの主音
■ - コードの構成音



C7

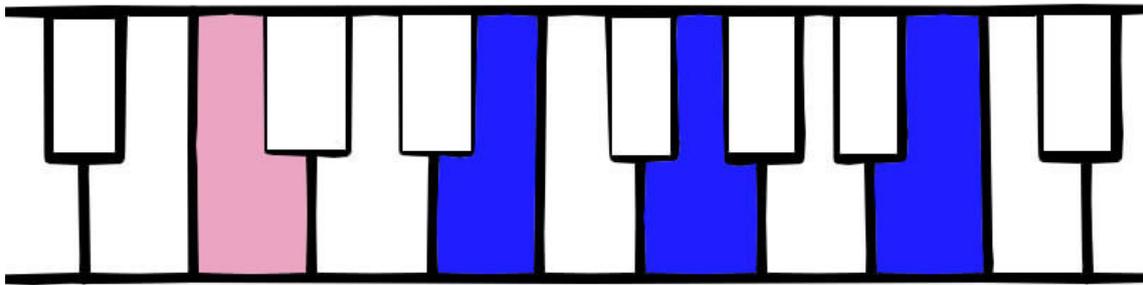
「~7」と表記し、**ドミナント・セブン・コード**といいます。
これは主音から数えて七つ上の音を半音下げたものをたした
ものになります。(微妙に違うかもしれない)

上のルールで書くと

「主音から5音離れた音」をついかしたものになります。
これにも「~m7」というものがありますが、意味合いは
「~m6」と同じです。

(つまり、「Cm7」では「ド、ミb、ソ、シb」の4つ)

■ - コードの主音
■ - コードの構成音



Cmaj7

「~maj7」と表記し、**セブン・コード**といいます。

今度は主音から数えて7つ上の音をたしたものになります。

上でのルールで書くと

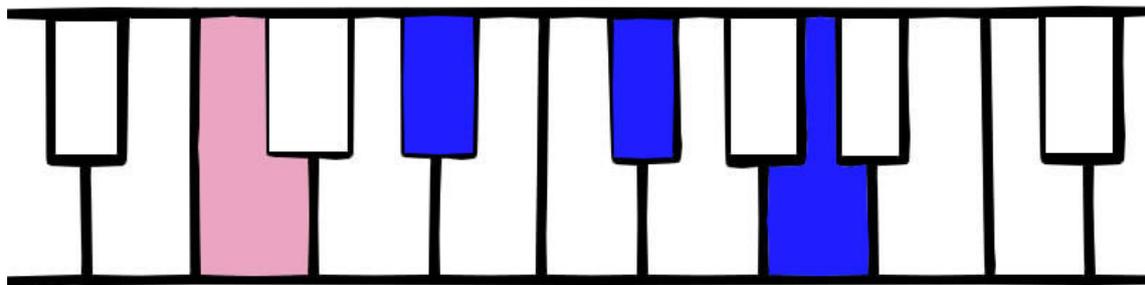
「主音から5. 5音離れた」音を追加したものになります。

これにも、もちろん「~mmaj7」というものがあります。

考え方は上と同じです。

(つまり、「Cmmaj7」では「ド、ミ \flat 、ソ、シ」の4つ)

■ - コードの主音
■ - コードの構成音



C dim

「~dim」と表記し、**ディミニッシュ・セブン・コード**とい
います。(長ったらしいなあ、もう・・・)

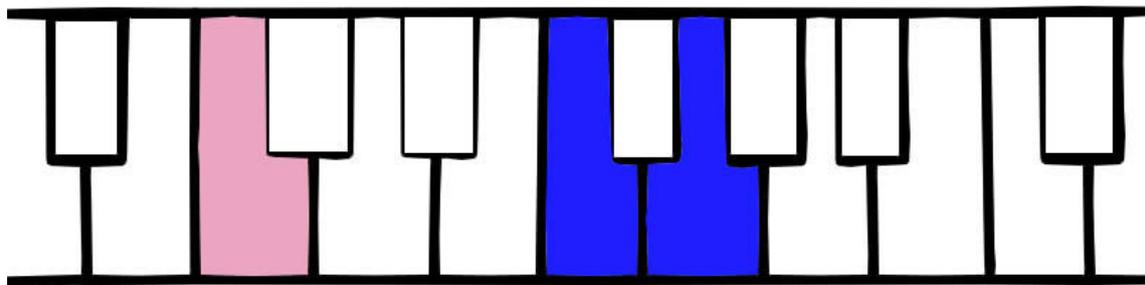
このコードの考え方は、ドミナント・セブン・コードの主音
以外の3つを半音下げたものと考えてください。

上のルールで書くと

「主音から5つ離れた音をたして、なおかつ主音以外を半音
下げる」となり、つまりは「主音、1. 5離れた音、
3離れた音、4. 5離れた音」の4つになります。

これには「m」をつけたものはありません。

■ - コードの主音
■ - コードの構成音



Csus4

「~sus4」と表記し、サスペンデッド・フォー・コードとい
います。(なげえよ!!)

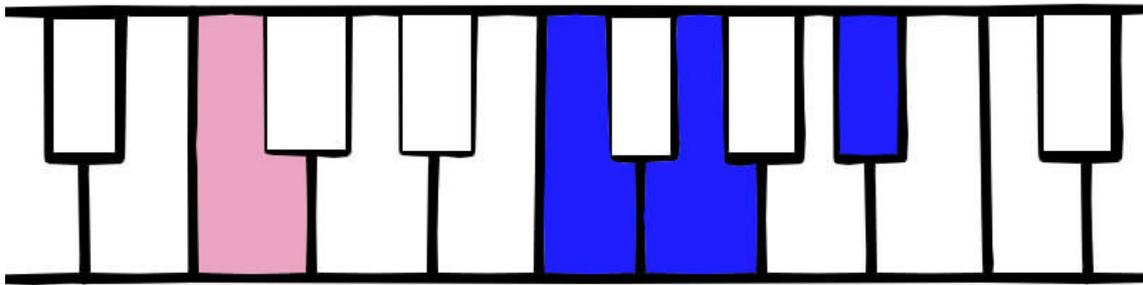
これは上のルールで書くと

「2離れた音」を半音あげて「2. 5離れた音」にしたもの
になります。

この変化させた音 (ここでは「ミ」が「ファ」になっている)
を「掛留音」といい、これを元の音に戻すことを「解決」と
いいます(実際弾くと分かりますが、なんかスッキリします)。
これにも「m」はありません。

■ -コードの主音

■ -コードの構成音



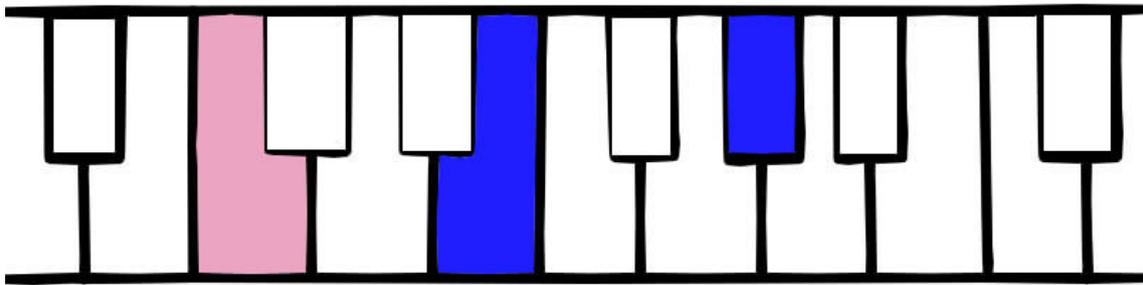
C7sus4

「~7sus4」と表記し、**ドミナント・セブン・サスペンデッド・フォー・コード**といいます。(んもう！！)

これは上での「C7」と「Csus4」の要素が合体したものです。(ただ単に「Csus4」のところで書けなかったので別にただけです。)

これにも「m」はありません。

■ -コードの主音
■ -コードの構成音



C aug

「~aug」と表記し、**オーギュメント・コード**といえます。

これは上のルールで書くと

「主音から3．5離れた音を半音上げる」つまり、

「4離れた音」にしたものです。

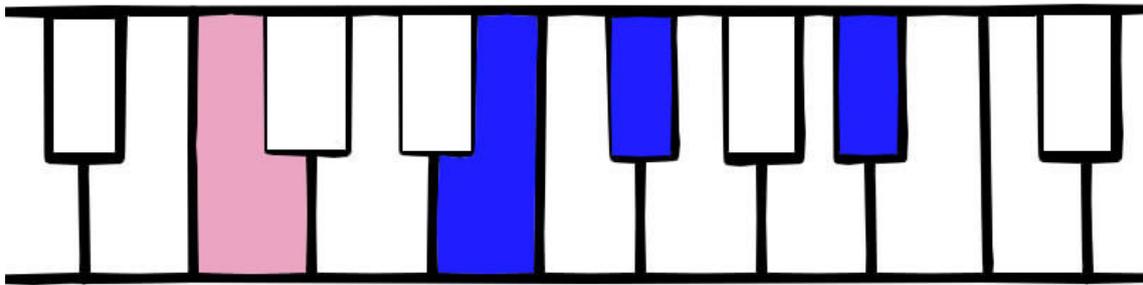
これには「m」はありませんが「7」がついた「~aug7」とい

うものがあります。これにドミナント・セブン・コードをた

したものです。

(つまり「Caug7」では「ド、ミ、ソ#、シb」の4つ)

■ -コードの主音
■ -コードの構成音



C₇₋₅

「~7-5」と表記し、**ドミナント・セブン・フラットド・ファイブ・コード**といいます。

これは上のルールで書くと

「~7」のコードから「3. 5 離れている音を半音下げる」という感じになります。

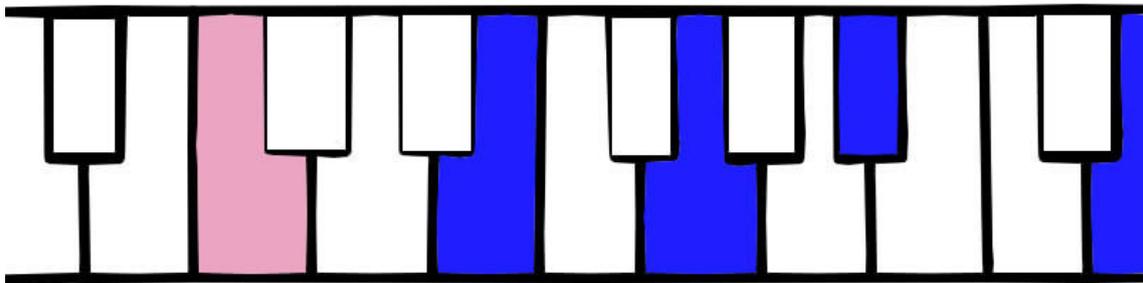
これには「m」が存在し「mm7-5」と表記します。

ちなみに「~-5」というものもありこちらは上の図でいう

「シb」、つまり追加した音をなくした形のものになります。(つまり、「C-5」なら「ド、ミ、ソb」の3つ)

■ - コードの主音

■ - コードの構成音



C₉

ここからはテンション・コードというものを説明していきます。テンション・コードは緊張感を出したいときに使われるもので上の図の「~9」とほかに「~11」、「~13」となるものがあります。それぞれ「C」につけたときは

C₉ = 「ド、ミ、ソ、シb、レ」

C₁₁ = 「ド、ミ、ソ、シb、レ、ファ」

C₁₃ = 「ド、ミ、ソ、シb、レ、ファ、ラ」

となっています。

あれ？「～10」や「～12」はないの？と思うかもしれませんが
がそれには理由がちゃんとあります。

仮に「C10」があった場合の音は

「ド、ミ、ソ、シ♭、ミ」になります。

「C12」なら

「ド、ミ、ソ、シ♭、レ、ミ」となると思います

(実際のところ知らん、だってこんなのないんだもん・・・)

すると「ミ」が二つあることに気付くと思います。

そうです、この場合、結局「ミ」になってしまいすでにある
構成音になってしまいます。

「和音」というのは違う音を同時に鳴らす事なのでこれでは
定義にはまりませんね。

それに実はコードというのは、その構成音ならば順番は好き
にしていいたいというのがあります。

ですから「C」で考えると

「ド、ミ、ソ」を

「ミ、ソ、ド」や

「ソ、ド、ミ」と弾いても全部「C」なんです。

だから、結局高音のほうに「ミ」をもってきても「C」の音にすでに入っているので、「C10」や「C12」というのはないのです。

ちなみに「コード」で音の順番を変えたものを「そのコードの転回形」を呼びます。

上の「C」でいうと

「ド、ミ、ソ」から「ド」を高音へ持って行って「ミ、ソ、ド」としたのを「第1転回形」

さらに「ミ」も高音へ持っていき

「ソ、ド、ミ」としたのを「第2転回形」といいます。

この「転回」というのは上で紹介したすべての「コード」の種類で適応することが可能です（ただしテンション・コードは除く）

これでコードの種類の説明は終了です。

雑記（てか愚痴みたいなもの）

どうも、巫女好きの人です。

本当は今回でコードの説明を全部できると思ったのですが
思った以上に長くなりました。（てか、図が多いなあ）

次回でコードの説明を終了させたいと思います。

（といってもここからも長いんだ・・・）

まあ鬱にならない程度にやっていくので、これを見てDTM
やる気になった人も頑張ってやってください。

あ～作曲やんなんきゃなあ・・・

by.....巫女好きの人